廊 外になる型式は、 から外に配される特徴を有する。 以後国分寺に多く見られるようになる。 両塔は存在しないが *塔が

3

n 中 る、 場合とがある。 から巡る回 国分尼寺に多く見られるものである。 |廊は、 これらの多くは八世紀代になって建立さ 金堂に取 ij 付く場合と講堂に 取り 付

る。 にお においても朝鮮三国時代の影響下の寺院や、 これ て各形式があり、 らの寺院配置構成は、各時代によって変遷し、 寺院建築の内容を一 発願者の建立趣旨 層複雑にしてい 同 時代

ŋ れていると言えよう。 れるようになる。 塔・金堂ともに釈迦と相等しく、 いたが、 この 一迦に通じる建物であるとされ、 ような 法隆寺建立ごろから塔と金堂は東西並 伽 藍配置が変化する理 そこには聖徳太子の仏教思想が強く打ち出さ 釈迦こそ仏教の心であるとさ 由 金堂は に、 塔は礼 後 の位置を保って 列に変わ 拝 0) 象徴であ Ď,

侶の出 た寺は るの 地から山岳へと移っていくようになる。 代から引き継がれた伽藍配置をもつもの また、 は **经**奈良時 現によって、 初期の仏教寺院から平安時代になると、 比 叡山延暦寺や高野山 代から存在するが、 新たな仏教思想の展開 金剛峰寺が代表されるものであ 本格的な もとより山岳に占地 0 な山岳寺院と認められ が始まり、 空海や最澄など僧 寺院は奈良時 寺院は一 平

口

る。

地 方寺院の)出現

造寺の広がり 真神原に、 伝さ 我が国 n 最 た 初 以 0) 後 本格的 は、 蘇 寺院 我 氏 ある法 が

飛

鳥

四年 の寺々が存在したという。 それから六九年経った持統天皇六年 によると推古天皇三十二年には全国に四六か所の寺が存 興寺 (五九六) (飛鳥寺) に完成した。 を建立する。 畿内を中心とした寺院数 前章で記したように、 寺の造営は九年かかり、 (六九二) には Ę 五. であ 推古天皇 四 [本書紀] 五. 在 一か所

が、 約十数倍の増 加傾向である。

まず、

初期寺院の造営について見てみよう。

ので、 れ、 が認められる。 初期瓦が生産されている。 飛鳥寺と時期を同じくして、 両者の特徴が瓦に見受けら 本格的な瓦製作技術によるものでなく、 生産個所は大きく筑前 この れる。 北部九州に西暦六〇〇年 瓦は瓦陶兼業窯で焼成され |地区と豊前 技術的に 地区に分けら 稚拙さ 前 たも 後

筑前 地 区

尾等が出土し、 各遺 跡 0) 出 土 平瓦 瓦の が 種 類 圧倒的に多 は、 軒丸瓦 丸瓦 平瓦 熨斗 克

鴟

珂 遺 跡において発見されている。 丸 瓦に つ W 、ては、 神 0 前 窯跡、 瓦当が無文の 月 0 浦 窯跡、 軒 元瓦は、 惣利遺 跡、 神 那 0

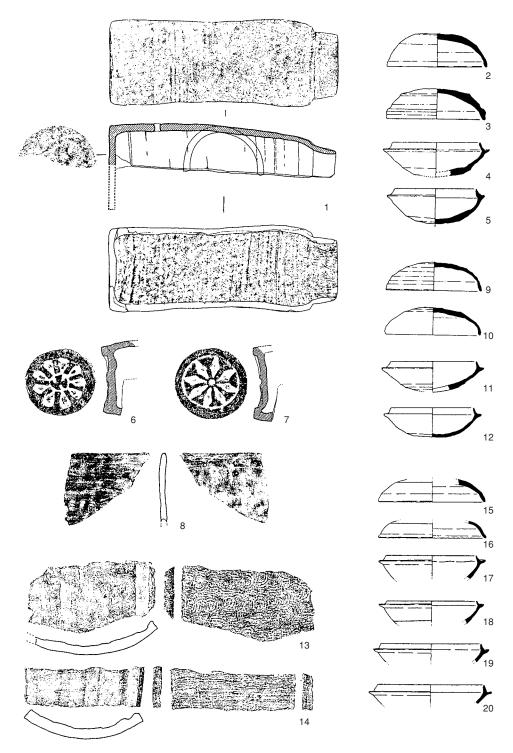


図3-4 **筑前**(神の前窯跡1~5、月の浦窯跡6~12) **豊前**(伊藤田踊ケ迫1号窯跡13~20) **の初期瓦と出土土器**

る

部に花文を施した作風で、 前と惣利遺 弁と八弁が を想定させる瓦当面である。 も基本とする瓦一本造りの原点がそこにあるように感じ取 月の浦と那珂遺跡は花弁をかたどったもので前者は単弁九 なり、 跡から出土し粘土紐による作りで、 後者は七弁の作りである。 本格的な軒丸瓦には遠いもの 共に凸 面端部には釘穴が認めら どちらも土器の 見、 壺 の、最 0) 底 底 n 部

面には 例は粘 痕や布 法が瓦らしく整えられてきており、 作られ、 びヘラ掻きによる調整を行っている。 痕が認められ、 痕が残る。 土紐と粘土板の造作があり、 平瓦は各遺跡で出土している。 他 の遺跡 布目痕と同心円文の瓦がある。 Ė 土板桶巻作りの方法をとり、 瓦端部及び凸面は共に丁寧にナデ調整し、 痕はなく、 浦の原窯跡出土の平瓦は、 0) 粘土板・粘土紐による桶巻作りの製作瓦法であ 平瓦類も前記の遺跡とほぼ同じ瓦を呈して 平瓦としての凹凸も見られない。 平面は 神 平行叩きや同心円の当て具 凸面は平行叩きが多い 方形板状を呈し、 0) 月の浦窯跡の平瓦は薄く 神の前に比較して調整 通常の瓦製作による模骨 前 の例 は、 最も稚拙で粘 Ш 指ナデ及 大浦窯跡 面 は 布 Ш

にお 瓦は八遺跡で発見されている。 面 11 は ても発見されるであろう。 細かな格子目の叩きの後、 平瓦と対になるため、 神 横方向 0 前 0 0 例)刷毛目 は 一〇片発見 他

> る。 の段差が低く全体に丸みを帯び、 は模骨と布目痕が認められる。 行っている。 野 添・ 大浦窯跡の丸瓦は、 凹 面 は全体に強い また、 玉縁付瓦はなく、 横方向のナデで仕上げら 胴部の弧深が非常に浅く 惣利遺跡の丸瓦は、 行基瓦凹 れ 玉縁 面に 幅 7

つれる崔みが桟っている。ない。大浦例は凸面に平行叩きがあり、凹面は模骨の痕跡と思ない。大浦例は凸面に平行叩きがあり、凹面は模骨の痕跡と思くれているが、出土数は少

広い。

屋根の大棟等に置いたのであろうか。

している。鴟尾の破片から想定してかなり大きくなり、腹部鰭鴟尾は月の浦一号窯跡から整理箱にして一箱分の破片が出土われる窪みが残っている。

筑前地区初期瓦出土遺跡

那珂遺跡	パス内遺跡	惣利西遺跡	浦ノ原四号窯跡	春日平田窯跡	大谷窯跡	小田浦二八地点	月の浦一号窯跡	野添一三号窯跡	大浦二号窯跡	神の前二号窯跡	遺跡名
福岡市	大野城市 春日市	春日市	春日市	春日市	大野城市	大野城市	大野城市	大野城市	大野城市	太宰府市	市町
軒丸瓦、丸瓦、平瓦	平瓦	軒丸瓦、丸瓦、平瓦	丸瓦、平瓦	平瓦	平瓦	丸瓦、平瓦	軒丸瓦、丸瓦、平瓦、鴟尾	丸瓦、平瓦、熨斗瓦	丸瓦、平瓦、熨斗瓦	軒丸瓦、丸瓦、平瓦	瓦類
六C末~七C初		七C前	七C後	七C前	七C前	〃 ~七C前	六C末~七C初	"	六C~七C前	六C末	時期

う。 ている鴟尾と作風を異にしていることから、 端 いう意見もある。 0) また、 頂 部付近で六〇誌、 鴟尾の文様構成や鰭端の表現方法が、 高さ一 四〇樣以 人上が復一 大陸ふうの造作と 元できるとい 従来発見され

豊前地区

瓦 で遡る例 豊前 平瓦である。 地 域 は は筑前は 遺跡だけである。 地域と瓦の発見例がやや異なり、 発見されている初 期 六世 瓦類 紀代 は 丸

る。 5 が指摘されており、 観察できる。 判断される。 調整は四種類に分類され、 平瓦は、 筑前地区神の 大分県中 供給先は福岡県の中桑野遺跡へ搬出していること 須恵質で凸面には同心円文叩き、 前窯跡の瓦と同じころの年代が与えられてい この瓦と共伴した須恵器 津市 伊 藤 粘土紐巻き上げによる桶 田踊ケ迫一 号窯跡 (坏身) 凹 例 面は があ の特徴 ŋ, 布 巻作りと 目 凸 痕 か が 面

紀後半ごろから末にかけて次々と造寺活動 号窯跡を最も初期の発見瓦として位置付けら 産と考えられている。 観察できるが、 **亅区灰原出土の瓦である。** 藤 後述するが、 田 踊 ゲ迫一 時 号窯に続く遺跡は、 期的には六世紀中 七世紀後半も早い時期に中津 豊前地区 平瓦で前期踊ケ迫例と同様 一の初期瓦はこの伊藤田 から後半ごろにかけ 同じ窯跡群 が展開され れ、 それ以降七世 市相原廃寺が 0) 伊 の特徴が 踊 藤 ることと た迫 ての 田 城 山

> 見されることで注 建立される。 かになっている 寺院伽 目され、 藍は定かでない 供給瓦窯に伊藤田ホヤ池瓦窯が明ら が、 古くから百済系瓦が 発

豊前地区初期瓦出土遺跡

灰原甲藤田城山J区	号窯跡伊藤田踊ケ迫一	窯跡 伊藤田ホヤ池瓦	相原廃寺跡	遺跡名
中津市	中津市	中津市	中津市	市町
平瓦、丸瓦	平瓦、丸瓦	平瓦、丸瓦	軒丸瓦、軒平瓦、平瓦	瓦類
七C中~後	六C末~七C初	七C後	七C後	時期

る。 在、 神の る「那津官家」に関与する建物・柵等が発見されており、 げられる。 物は鴟尾を大棟に飾るものであり、 ら六世紀末頃で、 見された。 で 我 筑前地区では軒丸瓦・鴟尾が発見されており、 その最も有力な遺跡として福岡市那珂遺跡 前 は正方位に主軸をとり、 が国初の寺院、 月 両地区の初期瓦の生産時期は、 家」に関与する建物との見方がある。 の浦例の軒丸瓦が施されていたことが伺 比恵遺跡は六世紀後半代の大型倉庫群 飛鳥寺建立 飛鳥寺を凌ぐ瓦が北部九州の 時期 宣化元年 方約二〇〇江四方の溝が発見さ (五八八) 造作は別として、 (五三六) 出土須恵器 を遡る可 の記 また、 比 両 恵遺 供給先の 地 掘立 える。 事に見え 能 0) 域 先には から発 那 性 跡 柱 が が 現 遺 建 建 あ あ か

跡

う。

宰府造営以前の官衙若しくは寺院の可能性が高いとの指摘もあ 遺跡の瓦類を整理することにより、 更に、 そこから前記した瓦類が発見されていることなどから、 筑前地区発見の窯跡出土瓦類と消費遺跡である那 需要と供給が明らかになろ 大

珂

が開花したものと想定されよう。 集団が定着し、 された。一方、 アの玄関口としての拠点施設である「那津官家」の存在が確認 前地方は、大野城市一帯に牛頸窯跡群の技術集団、及び東アジ く渡来人の痕跡を探ることができた。 朝鮮半島と近接する北部九州は筑前地方・豊前地方にい 豊前地方は綿・銅生産を中心とする渡来系技術 他 国よりいち早く渡来系人による初期仏教文化 この大きな要因として筑 · ち 早

九州の寺院建立 仏教伽藍が成立して、 格的に建立され始めるの 九州の地に寺院が本 は七世紀後半代で

推進記事は、 いたか、 ある。つまり、 造寺の数が物語っている。 天武十四年 いかに天武・持統天皇が仏教崇拝に力を注いで (六八五) 三月条に 天武期における仏教施策

とあり、 寺院造作を図ったことがこの記事によって示されている。 て出土する古瓦やその他の出 九州では筑前 詔 諸国毎家作佛舎、 この白鳳期において佛舎及び経典等を諸国に普及し、 筑後 豊前 乃置仏像及経、 土遺物から、 ・豊後・肥前 以礼拝供養 白鳳時代の寺院を見 肥後の各国 にお

> 後半から八世紀前半代の寺院の特徴を探ってみよう。 ることができる。ここでは筑前国と豊前国にしぼって、 七 世紀

式瓦と共に九州一 等に見られる独自の大宰府式古瓦が見られるようになる。 後半、 されることであろうが、考古学的な調査進行が薄いため寺院 内系と朝鮮系の二者が導入され、 周辺の寺院建立が始まっている。 貌が明らかにされていないのが現状である。筑前地域は 府政庁に隣接する観世音寺は老司式古瓦の発祥であり、 筑前国では一一寺をあげることができる。今後更に追 水城・大野城の建設を危機とし、大宰府の整備の過程で 円に波及しているのが分かる。また、 そこから鴻臚館式及び老司式 出土瓦を見ると大宰府 鴻臚館 には畿 七世紀 加発見 当寺院

筑 前 玉

長安寺跡	浜口廃寺跡	神興廃寺跡	長者原廃寺	城の原廃寺	三宅廃寺跡	塔の原廃寺	杉塚廃寺跡	般若寺跡	観世音寺	大分廃寺跡	遺跡名
朝倉町	芦屋町	福間町	粕屋町	福岡市	福岡市	筑紫野市	筑紫野市	太宰府市	太宰府市	筑穂町	市町村
									観世音寺式	法起寺式	伽藍
鴻臚館式	鴻臚館式				老司式	山田寺式	百済系	老司式	老司式	新羅系	出土瓦の特徴
八C前	八C前	八C前	八C前	八C前	八C前	七C後	七C末	八C前	八C前	七C後	時期

丸瓦Ⅲ-城·基肄城築城時期天智四年 方から発見されている百済系単弁軒丸瓦の年代基準をこの れたそうである。 で発見されている百済系単弁軒丸瓦は、 は川 主城原地区及び基肄城等で発見されている単弁軒丸瓦に求めら の寺として興味がもたれている。また、 原 寺 C の伽藍を模倣した配置を取り、 類が出土するなど、 これについて小田富士雄は、 (六六五) に定めている。 両寺院に共通する天智天皇発 その 僧坊 杉塚廃寺・観世音寺等 ルーツを大野城 跡 のから川田 筑前及び豊前: 原 寺式 大野 地 跡 願

廃寺は存在している。 寺式の伽藍復 にあるとされ、 から注視されてきたように、 た。その結果、 大分廃寺跡は平成三年から七年まで発掘調査を実施 元 大宰府と豊前地方を結ぶ古代官道の要所に大分 塔跡の規模形状と南北・東西溝を検出 (**案**) を試みられてい 新羅系軒先瓦で天台寺と深い る。 発見された瓦は 法起 関係 従 来

我臣 跡である。 華文軒丸瓦は、 b, 原 筑前地方でもう一つ特記すべきは山田寺系の瓦を検出する遺 日 願 廃 更に、 寺 向 した寺では 類似例に春日市上白水遺跡及びウト が、 跡 塔の原廃寺跡から発見されている単弁八弁複子葉蓮 ば、 甲寅年 筑後国になるが、 畿内山田寺系の変形ともいうべき文様を施して 『上宮聖徳法王定説』 ないかとの説があり、 (六四五) に孝徳天皇の病気平癒を祈願 小郡市上岩田 裏口に記載され 興味 グチ窯跡がある。 |廃寺跡 が 持たれる遺跡で てい 井上廃寺 る蘇 塔

> められ、 共に、 寺で検出した筑紫大地震 後に残され 検出され 井上薬師 前者観世音寺 他の遺構との切り合い関係から、 た興味ある課題である。 ており、 堂東遺跡等から山 畿内山 塔の原廃寺跡 (六七八年) 三田寺との密接な関係が 田寺式垂木先瓦、 これら瓦 ・上白水遺跡 の地 割 七世紀第3四半 n 0 痕跡 年 代は との関係も今 推定されると 蓮華文鬼 が 基 上岩 壇 期 に認 板等 田 廃

が 跡

境に東半部の宇佐地方と西半部の豊前地方とに寺院は分 る。 統を組む畿内瓦当文様を施していること。 豊前国では一一寺があげられる。 古瓦から見た特徴の一 9 は、 前者が川原寺式・ 地 形的に見ると、 後者は百済・ 法隆寺式 山 布して 玉 Ш

を

与えられてい

る。

前 玉

系

11

1 1 1	弥 勒寺硛	虚空蔵寺跡	法鏡寺跡	小倉池廃寺跡	塔の熊廃寺跡	相原廃寺跡	垂水廃寺跡	木山廃寺跡	上坂廃寺跡	椿市廃寺跡	天台寺跡	遺跡名
1	宇佐市	宇佐市	宇佐市	宇佐市	三光村	中津市	新吉富村	犀川町	豊津町	行橋市	田川市	市町村
									法起寺式	四天王寺式	天台寺式	伽藍
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	鴻臚館式	川原寺式・法隆寺式	法隆寺式		新羅	百済	新羅	百済	百済	新羅・百済・高句麗	新羅・百済・高句麗	出土瓦の特徴
Ī	八 C 前	七C後	七C後	七C後	八C前	七C後	七C後	七C後	七C後	七C後	七C後	時期

ŋ, など卓な 極的に対外交渉を行った地域である。 仏教信仰に精通した地域であることが推定される。 したごとく、 に畿内色の濃い宇佐地方の寺院である。 奈良南法華寺と同笵の塼仏が検出されており、 いることである。 . 複雑な歴史背景を伺うことができ、 綿や銅生産を生業とし、天台寺や香春岳に示されるように その豪族であった宇佐氏や辛島氏・ 椿市 越した文様構成 廃寺跡から発見され 秦氏・ のった宇佐氏や辛島氏・大神氏など互いの勢力宇佐地方は現在も信仰が厚い宇佐八幡宮があ 勝姓を名乗る渡来系部民集団が多く在 の朝鮮系瓦を中心とし、 ている高句麗系の瓦が発見され また、 畿内をはじめ中国 一方、 虚空蔵寺跡 豊前地域 古瓦も示すよう は前 いからは 「など積 天 台

図する仏教施策と反対方向に進行し始めたため、 建立は全国的にも少なくなり、 可能である。 況を見ることができ、 が進行した。そこには豪族層が持つ経済基盤や寺院造営に関 露呈するような状況が生まれ始めたのである。 立する以前の天智・ る技術・資材など地域を巻き込んだ背景が伺え、 こうした初期寺院の多くは、 七一三 律令制が成立する大宝元年 に 天武・ 豊前地方にもこれらの状況を伺うことが 持統天皇時期に各寺院が出現 寺院に対する優遇措置が 在地有力豪族を中心に寺院造営 (七〇一) そして政 政府は、 律令国· 以降の寺院 『家が成 穴府の意 した状 過 和 剰

諸寺多占田野其数無限。

宣自今以後。

数過格者。皆還収之。

企救郡 京都郡 菩提廃寺 椿市廃寺~ 豊前国分寺 玉 筑. 前 築上郡 木山廃寺 水廃 法鏡寺 天台寺 仲津郡 廃寺 筑前国分寺 大分廃寺 上毛郡) 求菩提山 上毛郡 相原廃寺 寺 観世音寺 小倉池廃寺 田河郡) 弥**5** 勒寺\ 虚空蔵寺 大宰也 ▲英彦 下毛郡 Ш 宇佐郡 筑 後 国 豐 後 玉

図3-5 豊前国の古代寺院分布図

の寺院は仏教思想が薄れ始め、 べられており、 つ寺院を除けば、 か国あげ 姓の田地を争って買い はならん」というお触れを出し、天平十八年 大きかったものと思われる。 から檀越となって建立した氏寺的性格を持つ寺院である」と述 とあるように、 これらの背景から、 (豊前・筑前・ 寺の 寺領を増やすことによって寺院建築への影響が ほぼ 持っている多くの田 集めるという、 肥前・肥後)、官寺、 郡一箇寺的な分布傾向が見られること 小田富士雄は「九州の いずれにしても八世紀代になって その役割は変貌しつつあったの 檀越の横奪ぶりが 野を 準官寺的性格を持 (七四六) には百 初期寺院跡を四 「占有すること

豊前地方の古代寺院

見られ、 地方の 半島系の渡来人に関わる寺院と、 ように、その大部分は七世紀代に建立されたと考えられる朝鮮 寺 院 特徴と言える。 各 双方が融合して特異な文化圏を形成しているのが豊前 説 ここで記す寺院は奈良時代から平安時代にかけ て存在した豊前地方の寺院跡である。 記述する主な寺院は以下のとおりであ 畿内文化を導入した寺院等が 前述した

天台寺跡

椿市廃寺跡

三、 木山 [廃寺跡

日

上坂 **| 廃寺跡**

相原廃寺跡 垂水廃寺跡

五 四

六

九 小倉池廃

寺跡

十 法鏡寺跡 弥勒寺跡

虚空蔵寺 跡

弋 塔の熊廃寺跡

また、 豊前国分寺跡、 菩提廃寺跡は後述する。

山川と金辺川の支流である御祓川に挟まれた標高四○から五 本跡は、田川市大字伊田六七五の一に所在する。 天台寺跡 (上伊田廃寺)

寺跡

は、

彦

どの台地上に位置する。

して利用された。 の滑空練習場のため、 に礎石等が残っていたが、 天台寺跡は、太平洋戦争前まで塔・ 礎石は地中に埋められ、 戦時中 (昭和十八年) にグライダー 金堂・講堂の 寺地は戦後畑 基壇ととも

され、 十から六十三年に実施され、 階有段登窯であることが確認されている。本格的調査は昭和 三十五年二号瓦窯跡が九州大学、 既往の調査は昭和五 同氏によって天台寺瓦窯が調査されている。 査 法起寺式の伽藍配置ではない 0 治結果、 金堂 講堂、 年、 山本通により礎石等の 伽藍配置等が明らかにされ 県、 回 廊 かと推定された。 市等で発掘 等の存在が明らかになっ その後、 調 配置図が発 査され、 翌年に 有 和

金堂跡では礎石二七個を検出し、 塔、 東西幅五〇尺、 南北幅四